

保育園児との交流が保育への興味・関心をもたらす影響

－専門教育科目「生活」における指導法の検討－

The effects on interests for childcare by communications with children

－The inquest of the way to teach the subject "Life Environment Studies"－

勝田 みな

Mina Katsuda

〈摘 要〉

本研究では、専門教育科目「生活」（以下、「生活」とする）において、園や学科の各種行事に参加することによって、子どもたちとの交流活動を行い、交流を繰り返す中で、保育への興味・関心をもたらす影響について検証した。「生活」では、体験を重視した授業展開を行っているが、カリキュラムの中に行事への参加を積極的に取り入れたことにより、普段はなかなか体験ができないようなことにも、活動を通して子どもたちと関わることの大切さを感じ得ることができた。また、平成 29 年告示の小学校学習指導要領解説生活編（2018）では、目標の改善として「具体的な活動や体験を通じて『身近な生活に関する見方・考え方』を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを明確にした」としている。前回の改訂の上に、特に思考力、判断力、表現力などが具現化するように見直された。

今後の課題として、「生活」では、スタートカリキュラムに即した授業を進めていく工夫が必要になる。また、次年度からの幼稚園教育実習に、学生が自信を持って積極的に取り組んでいけるようにするためにも、「生活」の授業を柔軟に進めていけるような内容を考えていく。

〈キーワード〉生活 行事 交流活動 興味・関心

はじめに

現代の小中高生たちは、生まれたときからすでにパソコンやインターネット、スマートフォンなどが身近に存在していた。それらを駆使して情報を得ることが当たり前のような環境で育った子どもたちは、将来の職業についてどのように考えているのかという観点から、小中高生に「将来になりたい職業は」という調査を行っている企業が複数ある。

将来なりたい職業の中で「保育士・幼稚園教諭」は、ここ数年、小中学生では3位以内にランク付けされている。小学生の夢は、本当になりたいと思うものが、ランクインしている傾向にあり、高校生・大学生と大人になるにつれ、夢よりも現実に目を向けて考えている傾向にあるようだ。例えば、日本ファイナルプランナーズ協会（2018）の調査によると、10年前（2008年）・20年前（1998年）の人気職業ランキングでも「保育士・幼稚園教諭」は5位以内にあり、全体的に女子の、人を世話する仕事に就きたい思いは変わらないことがわかと発表している。

学生が本学科への入学を決めた理由の一つは、「子どもが好きだから」と話し、小学生からの夢というランキングで示されたとおりの、「なりたい」という思いを持って入学した学生が多くいる。漠然とした理由ではあるが、とても大事な気持ちであり、教員は、学生がこの初心を持ち続けることができるよう指導をしていくことが大切になってくる。しかし、ただ子どものことが好きで、子どもと遊ぶだけが保育者の仕事内容ではない。入学してからは、保育についての理論を学び、実習に向けての実践も学んでいく。両方をしっかりと学んだのちに、実習等で保育現場に触れ、実践を積んでいくことになる。勝田（2014）は、「保育者として働こうとしている学生には、人間関係の楽しみを味わわせ、他者の考えをじっくり聴いたり、自分の考えを話したり、それらを進める、強める、深めることに慣れさせていく」と記したが、その考えは今も変わらない。それは、共感的な理解を経験することによって、集団での自分の居場所を確立し、やがて自立した個人として成長していくと考えたからである。また、将来は保育者として子どもたちを教える立場になるので、そのために考えることとして杉山（1994）は『『子どもから学ぶ教師』として大切なものは、①あたたかさ、②やわらかさ、③視野の広さ、④想像性の豊かさ、⑤人間としての良心が必要だ」と述べている。保育者には子どもの成長を願い、また自分自身に何が欠けているのかという問いを持ちながら働くことが求められている。たとえ、仕事がうまくいかなくても乗り越えていける強い精神力を身に付けることが必要になる。

筆者の担当する専門教育科目「生活」は、講義中心の授業形態ではあるが、教科の特徴からグループ活動を通して体験を重視した演習を多く取り入れている。また、将来、人と関わる保育者になりたいという思いで入学した学生が大半なので、人との関わりを積極的に取っていく必要性を常に考えている。そのためには、授業での座席を毎回替えるなどして、どのようなタイプの人とも関われるような工夫をしている。さらに、保育現場を身近に感じられるように、本学系列のⅠ保育園との交流を繰り返す環境づくりを意図的にを行い、保育園の子どもたちとの交流を持つことによって、学生の学習意欲、モチベーションを向上させたいと考えている。

I. 幼児教育

2018年4月から幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3つの法令が本格的に施行した。無藤（2017）は、「幼稚園も保育所も幼保連携型認定こども園も、日本の大切な幼児教育施設として位置付けられたから」と、述べている。改訂の背景には、幼児教育の重要性が高まっていたり、社会情勢の変化によって子どもが成長する過程で困難が出てきたりしたためである。

また、0～2歳児の保育施設利用が増えて、保育施設での保育が一般的に行われることも考えられ、それに伴い子育ての負担や不安が高まってきたことも考えられる。幼稚園、保育所、認定こども園など、すべての保育施設が共通するテーマで考えていく必要性が出て、保育の質を高めたいことから内容の足並みをそろえることになった。

3つの法令と同じく、小学校学習指導要領（平成29年告示）（2018）も改訂され、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を、学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」を目指している。子どもたちが社会で活躍する20年後にも通用する力を育むことが求められた。そして、「幼児教育において育みたい資質・能力」の三つの柱については、以下のとおり定義づけられた（表1）。

表1 育みたい資質・能力

1	豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
2	気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
3	心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

無藤（2017）は、三つの柱の資質・能力について「1つめは『何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）』乳児期に言い換えれば『気づくこと・できること』。2つめは、『知っていること・できることをどう使うか（思考力、判断力、表現力）』あらゆるものに関して子どもが自分なりに関わる時に、一瞬止まってこれはどうなんだろうと考えること。3つめは『どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）』最初の2つの能力を推進する力」と解説している。つまり、三つの柱の視点は、幼児教育が小学校以降の学校生活や学習の基盤につながることであり、それは、幼児教育と小学校との連携や接続を意味していることになり、小学校の生活科を中心とした合科的・関連的な指導などの工夫、すなわちスタートカリキュラムを円滑に図るよう努めることがより必要になってくるのである。

今回、教育の大きな改革が進められ、幼児教育の重要性が高まってきている。この改訂を通して、未来の社会を生き抜く力を持った子どもを育てることが大切になってきた。そのためにも学生のうちから保育に向き合う姿勢をしっかりと身に付け、将来、保育者として、幼児教育で育みたい資質・能力、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を確認しながら、保育活動の充実を図っていくことが重要になる。

Ⅱ．専門教育科目「生活」

1 「生活」の授業内容

「生活」は、幼稚園教諭免許と小学校教諭免許を取得するには必要な科目であり、基本的には1年生全員が受講することになる。

授業形態は講義中心であるが、ペアあるいはグループによる学習を組み合わせるなど、演習も取り入れている。さまざまなタイプの人と関われるように、毎時間あるいは授業の中でも座席やペアあるいはグループのメンバーを替えて、他者の良い面に多く気付けるよう、意図的に人と関わることのできる環境を作っていた。授業の終わりにはミニレポートを提出させている。

毎年、Ⅰ保育園と本学科の行事と関連させて授業を進めている。行事は、儀式的なものから学習を通じて習得した知識や技能を応用して活動したり、季節的なものについては主体性が大きく関わったりする。体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を培いながら参加者全員の協力が必要になってくる。年に1回の季節の行事はさまざまある。参加の目標が明確で参加者の願いや思いが込められ、楽しみを増したり、Ⅰ保育園との結びつきを強めたりするためにも、行事に学生が関わることで、双方が知り合う機会になる。本研究では、Ⅰ保育園で開催される10月の「うんどうかい」と、本学科へⅠ保育園の子どもたちを招いて行われる12月の「クリスマスマーケット」を取り上げることにした。

2 本研究の目的

保育者の資質としては、豊かな感性と愛情を持って一人一人の子どもに関わらなければならない。そのためには、広い視野を持ち、社交性や冷静な態度、正しい言葉遣い等が求められている。

教育・保育に関する技術面（例えば、ピアノ）も必要だが、社会動向を理解し、人としての情熱や子どもたちの命を預かっているという責任感が重要である。学生の保育者像は、「イメージ」としか描けておらず、学修が進むにつれて保育についての気持ちが揺れ動く者も出てくる。せっかく保育者になりたいと思って入学したのだから、夢をかなえて保育者になってもらいたいと願うばかりである。

そこで、学生に保育者の仕事に自信をもって就いてもらうためにも、入学後も保育への興味・関心を持ち、できればその気持ちを高めていけるように指導していくことが大切になってくる。本研究では、専門教育科目「生活」において園や学科の各種行事に参加することによって、子どもたちとの交流活動を行い、交流を繰り返す中で、保育への興味・関心をもたらす影響について検証した。

Ⅲ．行事に参加する

1 I 保育園運動会への参加

本学科が創設されてから現在まで継続してI保育園の「うんどうかい」に参加している。学生参加の種目としては、「おうまにのって」を恒例種目として毎年出場している。学生3人で騎馬（「おうま」）を組み、その「おうま」に子どもたちを乗せて、学生が作成したお面を取りに行く種目である。競技としては、「玉入れ」で、子どもたちと対戦する。かごの高さを学生用に高くして競争する。その他、借り物競争では、走者に指名された学生は参加する。

また、運動会運営の係分担としては、器具係を学生が担当している。保育者が作成した演技図や器具を確認して、競技の合間に準備片づけを素早く行った。また、事前に保育者はどのような動きをしているのか、運動場や競技で使用する器具はどのようなになっているのか、保育者は運動会当日までにどのような準備をしているのかなどを、「生活」の授業内で観察してくるよう指示をした。

(1) 運動会当日

運動会に参与観察するので、当然、服装は保育者としてふさわしい服装を指示した。入学して半年経つが、保育者としての立ち居振る舞いを、丁寧に何度も指導し続けている。外見から保育者像を意識することは大切なことである。時間厳守で、早く園に到着した学生は率先して保育者を手伝い、環境づくりを行った。学生は自分が何歳児担当で、いつ器具係を行うのかは事前に知っているのも、仲間での打ち合わせも各自に任せた。

保育者だけを観察するのではなく、学生と子どもたちとの交流も大事な視点になる。「おうまにのって」では、騎馬へ子どもたちを乗せる時は怖がらせず、騎馬に気を取られることなく、子どもたちの様子を見て、子どもたちの声を聴いて、表情からも読み取ることが必要になってくる。騎馬が動くと、怖がる子どももいるので、学生たちは子どもたちの表情に注視して対応していた。学生の表情は、とても優しい雰囲気や温かい気持ちを全身で表すほど、子どもたちに集中していた。運動会当日はたいてい暑い日のため、保育者の子どもたちに対する指導方法や、保護者や地域の人々への対応も、学生にとっては行事に参加したからこそ学べたことだった。

(2) 行事をふりかえって

「うんどうかい」後の「生活」で振り返りを行った。運動場などの環境づくり、保育者の言動、子どもたちの様子、自分の出た種目、器具係についてである。初めて知ったことや経験したことも細かく思い出させて、具体的に記入させた。

学生の感想は、「安全面に気を配っていた。たとえば、遊具を園庭の端に移動させ、使用できないようにひもで縛る」、「先生たちは、運動会のプログラムがすべて頭に入っている」、「競技の準備や片付けは迅速に行っていた」、「うまく競技ができなかった子に励ましの声をかけていた」、「保護者の人にも笑顔で対応していた」、「子どもが話しかけてきたら、その子の目線で話していた」、「子どもから『プレゼントあげる』と言って園庭の砂をもらった先生が『ありがとう』と言ってその砂をポケットに入れていた」など多岐にわたった。

その「ふりかえりシート」をⅠ保育園の園長に提出し、Ⅰ保育園の保育者に学生の振り返りを伝えていただいた。学生ならではの視点は、保育者自身も自身の保育を振り返る良ききっかけとなった。このような根拠でこうしたとプロの視点を再度学生にフィードバックで教えてもらえた。

園長先生には事後指導として直接学生に話をしていただいた。学生は、前期からⅠ保育園へはボランティア等で出かけているので、名前を知っている子どもたちもいた。子どもたちの成長を感じるとともに、運動会での行事に参加したことで仕事の厳しさや尊さを改めて認識することができ、保育者への尊敬とあこがれをさらに強く感じた者もいた。中には、運動会への参加に消極的だった学生がいたが、子どもたちの笑顔や保育者全員が運動会という大きな行事の成功のために一丸となっている光景を目の当たりにして、しかもその空気感を体感し、徐々に笑顔が増えてきた者もいた。子どもたちとの交流から学生は、新たな発見や保育者への夢を改めて確認できた行事となった。

2 クリスマスマーケット

12月には「クリスマスマーケット」を開催し、Ⅰ保育園の子どもたちを招待した。学生たちは、ゼミごとに2～3種類の店を出し、品物を作成し、子どもたちが買い物をして楽しむ行事である。

基礎ゼミナールⅡの時間と「生活」の授業時間で計画と準備を進めた。「生活」では、品物を作成したり店作りを行ったり、当日は子どもたちをもてなしたりした。司会進行や歌、楽器演奏などの係分担も学生が自分たちで話し合い決定した。

(1) クリスマスマーケット当日

クリスマスマーケットの会場は、体育館である。買い物がしやすいようにレイアウトを考えて、それぞれ店を準備し子どもが興味をもつように品物を並べた。学生は、クリスマスにふさわしい服装で子どもたちを迎えた。Ⅰ保育園の子どもたちは、バスに乗って本学

へ来るので、出迎えから学生のおもてなしは、始まっていた。子どもたちが全員そろうまでの時間は、手遊びを担当する学生が子どもたちとともに楽しい雰囲気を作った。司会者が会を進めて、歌や楽器演奏を行い、クリスマスマーケットを盛り上げた。歌や楽器演奏は、音楽基礎Ⅱ（表現）の時間に練習を重ねていた。

買い物がスタートすると、子どもたちと学生との交流が活発になった。子どもたちが店に来てくれるように、声をかけ、品物の紹介をしていた。笑顔を絶やさず明るくふるまっている学生が大半だった。中には買い物袋を2枚持っている子がいたが、欠席した子の分だと聞くと学生は子どもの優しさに触れ、その子を褒めたり欠席した子の好きな色を聞いたりして、優しい子どもの気持ちに寄り添っていた。買い物が終了すると、学生全員で歌のプレゼントをしてクリスマスマーケットが終了した。子どもたちを見送り、片付けを全員で行った。

(2) 行事を振り返って

I 保育園の子どもたちの数だけ、品物を作成し、店作りもすべて手作りだったので、当日を迎えるまでの準備はかなりの時間を要した。授業時間内で準備ができない店は当然ながら、授業後、残って作成したり、空き時間を利用したりとチームワークが試された。子どもたちの笑顔や楽しみにしている思いを感じて、制作に集中できる学生もいれば、なかなかエンジンがかからない学生もいた。そこをどのように進めていくのかは学生たちの話し合いにもよるが、「生活」の授業内ではクリスマスマーケットでの目標を確認し、どのようなことならできるのか、やれそうなのかを整理させて、根気よく、お互いに声がけをした。

学生の感想は、「子どもが興味を持って来てくれたのはうれしかった」、「品物を作っている時は、終わりが見えなかったのでどうなるのか心配だった」、「歌と一緒に歌ったり、楽器演奏で子どもたちが歌ってくれたりしたのは、感動した」、「休んでいる子の分を選んでいる子は、やさしいと感じた」、「先生はどの子にも声をかけていた」、「寒い日に元気な子どもたちを見て、元気をもらえた」などだった。

子どもたちとの交流で、学生が子どもたちから教えられることがあった。一緒に歌を歌ったり手遊びをしたりもそうだが、欠席した子の分を用意してあげる子の優しい気持ちに触れた学生は、思いやりの心を持つことの大切さを子どもから再確認した。

また、消極的にクリスマスマーケットに参加していた学生は、子どもから声をかけられ、こちらが逆にしなければいけないことを改めて感じていた。学生自身に体験が不足している近年、子どもたちとの交流で逆に気付かされるできごとだったが、そこで気付けたのはまずは良かったと言える。コミュニケーション力が乏しいと自分で思い込んでいる学生も、子どもたちとの交流で、自分のやるべきことに進んで取り組む気持ちになり、役割を果たせた学生もいた。

IV. 考察

保育者は、人と円滑な関係を結ぶことができる能力や資質を持っている人が、自らこの職を選択し、働き方にもよるが長く勤めていくことが可能な仕事である。保育に関する技術面のスキルも必要だが、社会動向を理解し、人として情熱や子どもの命を預かっているという責任感が重要であり、何よりも子どもが好きであることが絶対的な条件である。せっかく保育者になりたいと思って入学したのだから、夢をかなえて保育者になってもらいたいと願うばかりである。そこで、学生が保育者の仕事に自信を持って就くためにも、入学後も保育への興味・関心を持ち、その思いを高めていけるように指導していくことが大切になってくる。本研究では、専門教育科目「生活」において園や学科の各種行事に参加することによって、子どもたちとの交流活動を行い、交流を繰り返す中で、保育への興味・関心をもたらす影響について検証した。

幼児教育において育みたい資質・能力の三つの柱と幼児の終わりまでに育ってほしい10の姿から、行事をとおして保育園の子どもたちとの交流を「生活」の指導法から考えてみた。幼児教育において育みたい資質・能力について、文部科学省（2016）では、「この時期に育みたい資質・能力は、小学校以降のような、いわゆる教科指導で育むのではなく、幼児の自発的な活動である遊びや生活の中で、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、できるようになったことなどを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育むことが重要である」と示された。遊びを通して一体的に育んでいくことで、心身の調和のとれた発達過程を意識して、一人一人のよさに着目して指導していく必要がある。

平成29年の改訂（改定）では、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の3法令が、同時に改訂（改定）された。「保育所保育指針」（2017）では、「保育とは何か、保育で大切にすべきことは何か」という基本方針が示された。今回の改定の特徴として、保育所が初めて日本の「幼児教育施設」として位置付けられたことである。汐見（2017）は、「保育所においても幼児教育を行う施設として『育みたい資質・能力』そして『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を確認しながら、乳児期からの保育を行っていくことが大切」と述べており、教育に関する部分は幼稚園・認定こども園と同じになったことが理解される。それに伴い、職員のスキルやキャリアの向上のため、研修や職場環境の整備などが求められている。Ⅰ保育園の保育者たちの取り組みは、今回の改訂（改定）前からすでに、教育の中で育みたい資質・能力（前掲表1）を実践していると言える。

1 行事について

「生活」の目標の中に「体験や活動を楽しみ、その過程で起こる気付きを思考の芽生えととらえ、具体的な事例を通して目標を達成する」とある。体験を授業の中で繰り返し行ってきたが、行事を取り入れることによって、何をするのかが明確になり、学生自身の取り組みは、明らかになった。

I 保育園の「うんどうかい」を取り上げたのは、保育者が練習の過程で子どもの意欲を引き出し、どのような力を育てるのか、そのためにはどのように援助し、見守って育てていくかなど、保育者同士で確認し話し合っていたと聞いたからである。

三つの柱の「知識及び技能の基礎」の中で、「できるようになったりする」の視点から、跳び箱がとべなかった年長児が、何度も繰り返し練習をして、運動会当日は見事とべるようになった事例からも、理解できる。できたという達成感を得て、それらが跳び箱への技能の基礎になっていったと言える。担任の保育者だけが、跳び箱の練習を見ていたのではなく、園長をはじめ園の保育者が子どものがんばりを見ており、保育者全員で声をかけたり見守ったりした。

また、「幼児の終わりまでに育ってほしい10の姿」(表2)の中では、跳び箱運動は、「健康な心と体」と「自立心」に当たる。充実感や満足感を持って自分のやりたいこと、自分でしなければならないことを自覚して、あきらめずにやり遂げることで自信を持って行動する姿をめざしていく活動になっている。

表2 幼児の終わりまでに育ってほしい10の姿

・健康な心と体
・自立心
・協同性
・道徳性・規範意識の芽生え
・社会生活との関わり
・思考力の芽生え
・自然との関わり・生命尊重
・数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
・言葉による伝え合い
・豊かな感性と表現

運動会へは保護者が応援に来る家庭が多いが、近頃は祖父母までも応援に来て、家族全員で楽しみにしている行事の一つになっている。子どもたちのがんばりが披露できるよう、また、応援に来てくれる人たちの気持ちに応えるためにも、準備は何日も前から行っており、運動会当日を特別な日と思わず、普段の保育から「毎日が運動会」と子どもたちに話

し、日常の保育でのできた喜びを意識して保育を進めていたⅠ保育園の方針が、子どもたちの成長につながっていた。

クリスマスマーケットでは、Ⅰ保育園の園児が客として、学生が開く店へ買い物に行く「買い物ごっこ」であるが、遊びの中に見る「資質・能力」(前掲表1)の三つの柱の視点でクリスマスマーケットを考えてみる。

客としての子どもたちは、家庭で買い物に行った経験から、手に取ったり、品物の遊び方などを店員である学生に聞いたりした。三つの柱の「思考力、判断力、表現力」の中では、「思考力、判断力」の視点で買物をしていた。これまでの経験や知識から学生との交流も活発になった。また、複数ある店から、どの順番で回ると効率が良いのかなどは、「思考力」の視点が出てくる。

次に三つの柱の「学びに向かう力、人間性等」の視点では、「人間性」で見えてみると、欠席した子の代わりに買物をしてあげる点で、相手を思いやる気持ちを持ち、友だちのためにこの品物は絶対に持ち帰るという買物への意欲の高まりにつながっていた。

また、「幼児の終わりまでに育ってほしい10の姿」では、「思考力の芽生え」、「言葉による伝え合い」に当たり、買物に積極的に関わり、自分で判断したり考え直したりして、買物を楽しく、喜びを感じながら行っていた。また、言葉を介して、友だちや先生、学生たちと心を通わせていた。

体験などを通して学生が思う子どもたちへのイメージについて、長沼・佐藤(2016)は、実習に取り組む学生にアンケートを行った。「実習前は『かわいい』『無邪気』など表面的であったものが、実習後は子どもを『意欲的な存在である』というように、関係構築や観察の上で成立すると思われるようなイメージを持つ対象者が増えた」と述べており、保育現場の体験から園児との交流によって、効果が出てきたと考えられた。

学生たちは、前期からⅠ保育園とは交流があるので、子どもたちの成長を時間の経過で感じられた学生は、意欲的に取り組んだからこそその感想であると理解できた。この交流から、子どもたちへの関わり方への理解が深まり、「子どもが好きだから保育士になりたい」という漠然とした感情から、保育への興味・関心を高めていった。学生が、心を動かされる体験をしていくことで、おもしろい、きれいだ、不思議だ、何だろうといった思いが意欲を生んで、好奇心から保育者として実現してみようかなという動機付けや保育者像を明確にして保育者としての態度につながっていった。田甫(2016)は、「どちらかからどちらかへ一方的に関わりをもつのではなく、両者が共に主体的になり、相互の関わりをもつということである。その際に、身体的同調性をもつことが有効である」と述べており、Ⅰ保育園の「うんどうかい」と「クリスマスマーケット」において、園児との交流は効果があったと言える。

また田甫は、「有意義な交流活動にはさらに以下の二点が重要になるということが考察された。①幼児の興味関心に沿ったことを媒介として交流を図ること。②大学生が幼児の

興味関心を満たす能力をもっており、幼児のモデルとなること」と続けて述べ、I 保育園の園児と学生が共に活動に対して高いモチベーションを持つことが重要になり、訪問したり迎えたりしたとしても学生が計画、準備、内容をしっかりと取り組むことが大前提であると言える。また、園児のモデルになることへの必要性として、共に歌ったり遊んだり、子どもへの言葉遣いだったり、「生活」の授業内で十分に双方向の関わり方を学び、実際に交流して有意義な体験から将来の保育者像へ意欲を高めていけたことが明確になった。

2 就職につなげていくには

卒業後、就職し働く気持ちを持続させるのは難しいと思っている学生がいる。厚生労働省（2015）の調査によると、保育士の離職率は、勤続年数2年未満は14.9%、2～4年未満は13.6%である。新卒で夢をかなえて就職したのだから、困難を乗り越えて継続してほしいものである。保育者は、比較的長期にわたって求人が出るが、新卒で先生と呼ばれる仕事に就くわけなので、焦らずに自分に合った園を見極めて就職を決めてほしいと願う。

学生時代は、実習をはじめ、うまくいったり、いかなかったりを繰り返して学んでいくものなので、そのためにも体験活動は欠かせないものである。また、精神的な強さも学びながら、たとえば小さな成功を味わわせて、メンタルを強くするための支援も必要になってくる。保育の理論を学ぶのは、命を預かる仕事に就くので知っている当然のことであるが、体験することも同時に学んでいくのは必要である。もし失敗をしてしまっても、それをどのように克服していくのが重要になり、少々のことであきらめたり、投げ出したりせず、乗り越えようという気力が大事になってくる。学修だけではなく、子どもたちとの交流も学生のうちから十分に体験させて、保育の現場を肌で感じ取ることも大切なことである。実習でも就職でもマイナス面の「合わないから」という思いを抱くと、大抵は相手のせいにして終わってしまうが、これも体験を何度も繰り返し、子どもたちとの交流を多くしておく、見えなかった面が見えたり、動けたりができるようになっていく。そして、その経験が就職につながると、晴れて「先生」と呼ばれることになり、離職してしまうことは少なくなるとされる。保育者という専門的な職業は一日でプロになれるはずはない。子どもたちとかかわってこそ子どもたちがプロにしてくれるわけである。その子どもたちの思いに応えるためにも、長く勤めていける保育者を輩出するのが保育者養成校の務めである。

おわりに

入学してから学生は、理論を学ぶ。その基礎的な知識を生かして、「生活」の授業の中で実際に子どもたちと交流した経験によって、学生の興味・関心が高まってきたことが明らかになった。その高まった気持ちを維持し、意欲的に物事へ取り組んでいく姿は、将来

の保育者あるいは教育者としての「人」を作っていくことにも影響した。また、子どもたちとの交流体験は、学生の学修意欲にも変容をもたらした。

卒業生の中には、学生時代に子どもたちとの交流を繰り返して、保育者への夢が膨らみ、現在は、長く勤めたいとさらに希望を持って保育者としてがんばっている者もいる。学生にもその卒業生のように夢や希望を抱いて、保育者として勤めてもらいたい。

今後の課題として、小学校との連携において、スタートカリキュラムに即した授業を進めていく工夫が必要になる。幼児期から小学校に移行した中で、突然、違う存在になるわけではなく、発達や学びは連続しているので、移行を円滑に進めるためである。また、学生が次年度からの幼稚園教育実習に自信をもって積極的に取り組んでいけるようにするためにも、「生活」の授業を柔軟に進めていけるような内容を考えていく。

註：引用文献・論文

Florence (2017) 無藤隆『保育・幼児教育の第一人者、無藤隆先生に訊く！保育所保育指針改定のポイントから読み解く、保育の専門性とは』

<https://florence.or.jp/news/2017/11/post20954/> 2018/10/10 閲覧

勝田みな (2014) 「専門教科『生活』の講義における自分自身への『気づき』」名古屋経営短期大学『紀要』第 55 号 pp.41-55

厚生労働省 (2015) 『保育士等における現状』

厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針解説』

杉山浩之 (1994) 『新世紀に生きる子どもの自立』法政出版

田甫綾野 (2016) 「大学生と幼児との交流活動に関する質的研究 ―交流のあり方をめぐって―」玉川大学教育学部紀要『論叢』pp.81-100

長沼貴美・佐藤美香 (2016) 「保育園体験実習が大学生の子どもに対するイメージ及び学習意欲に及ぼす影響」『創大教育研究』第 26 号 pp.65-74

日本ファイナルプランナーズ協会 (2018) 「将来になりたい仕事」

<https://kyodonewsprwire.jp/release/201804203156> 2018/10/10 閲覧

無藤 隆・汐見稔幸 (2018) 『はやわかり BOOK』学陽書房

文部科学省 (2016) 『幼児教育部会における審議の取りまとめ (報告)』

文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』

文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領解説 生活編』